Little Women における結婚と自己実現の探求

陳　懌懿

1. 序論

Louisa May Alcott の *Little Women* は、南北戦争前後のアメリカ社会を背景に、マーチ家の四姉妹の成長を描いた作品である。特に次女ジョーは、自由と独立を重んじ、伝統的な性別役割に挑戦する姿勢で注目される。19 世紀のアメリカでは女性に家庭生活を中心とした役割が期待されていたが、ジョーはそうした規範に抗い、自らの生き方を模索する。本稿では、ジョーの成長過程と恋愛結婚観の変化を分析し、結婚と自己実現の両立可能性を探る。

2. 少女期ジョーの性格と恋愛結婚観

2.1 お転婆娘ジョー

ジョーは物語の冒頭で“tom-boy” (9)「お転婆娘」として描かれ、スラングを使ったりホイッスルを吹いたりと、当時の「女性らしさ」に反する行動を見せている。彼女は、淑女らしく振る舞うべきだとの姉妹の忠告に反発し、女性に課された規範への挑戦を続けている。しかし、これは単に性別そのものへの反発ではなく、女性としての自由の制限に対する不満と言える。また、南北戦争で病に倒れた父親の治療費を工面するため、大切にしていた髪を売る場面では、家族への強い責任感と自己犠牲の精神が描かれている。マーチ叔母に頼ることを避け、自らの力で問題を解決しようとする意志の強さも特徴的だと考えられる。

以上のことから、ジョーは「女性らしさ」という社会的期待に抗いながらも、家族への責任感を持ち、それに基づいて自己犠牲の精神を持つ人物として描かれていることがわかる。

2.2 恋愛結婚に対する態度

19 世紀のニューイングランドでは、産業革命の影響で女性に「家庭の天使」としての役割が期待され、男性は外で働き、女性は家庭を守るという明確な役割分担が定着したとされている。物語の長女メグは、貧困な家庭教師ジョン・ブルックとの結婚を機にその道を選ぶ。一方、ジョーはメグの結婚に複雑な感情を抱き、メグが自己実現の道を歩むべきだと考えていた可能性がある。また、ジョー自身も恋愛結婚に対して独自の考えを持ち、ローリーからのプロポーズを断る際に次のように述べる。

> “I’m happy as I am, and love my liberty too well to be in any hurry to give it up for any mortal man.” (387)

この発言から、ジョーが結婚による自由の喪失を恐れていたことがうかがえる。彼女は結婚が夢を諦めることや家庭とのつながりを損なうものだと捉え、自己実現と結婚の両立は困難だと感じていたと言えるだろう。

3. 作家としての自己実現

3.1 文学に対する才能と情熱

ジョーは恋愛や結婚に対して抵抗を感じる一方で、文学に強い情熱を持っていた。姉妹たちと演劇を行い、台本を自ら執筆するなど、文学への才能を示している。また、家族に内緒で作品を出版社に送るなど、作家としての夢を追い続け、成功を収めた。この成功により、作家としての夢だけでなく、執筆が家族を支える手段になる可能性を実感するようになる。

3.2 決断と試練

ジョーは家計を支えるため“sensation story” (286)「扇情小説」を書き始めるが、次第に金銭的手段として執筆を捉えるようになる。家族の状況やローリーとの関係に悩み、ニューヨークで新たな生活を決意する。ニューヨークで出会ったベア教授は、ジョーにとって重要な存在となった。彼は「扇情小説」の内容が読者に与える悪影響を指摘し、“I would more rather give my boys gunpowder to play with than this bad trash.” (377) と忠告した。ベア教授の批判は、ジョーに初心を思い出させ、純粋な文学的価値を追求するきっかけを与えた。

3.3 作家としての自己実現

ジョーはベア教授の指摘を受け、「扇情小説」の執筆をやめる決意をする。その後、最愛の妹ベスが亡くなり、深い悲しみに包まれるが、この喪失はジョーにとって創作への原動力となった。ジョーはベスを追悼し、彼女との思い出や姉妹との絆をありのままに物語に昇華させる。この作品は、“with no thought of fame or money” (462)を念頭に執筆され、多くの読者の心に響き、大きな成功を収めた。ジョーは、この創作が純粋な感情から生まれたものであることを実感し、作家としての自己実現を果たしたと言える。ベスの死を乗り越え、自分自身の価値観を貫いて創作を続けることで、ジョーは作家としての本当の成長を遂げた。この過程は、Maslow の「自己実現」の概念と照らし合わせることができる。自己実現とは、個人が自分の潜在的な能力を最大限に発揮し、独自の道を追求することを指す。ジョーは悲しみを乗り越え、自己の内なる衝動に従って創作を続けることで、この自己実現を達成したと捉えられるだろう。

4. ジョーの結婚

ジョーはメグの幸せな結婚生活やベア教授との交流を通じて、結婚に対する考えを変えていく。“Marriage is an excellent thing after all.” (460) と語り、結婚が喜びや充実感をもたらす可能性に気づく。ジョーはローリーとベア教授を比較し、自らの道を選ぶ。

ローリーは魅力的で音楽への情熱を持つが、ジョーは彼に恋愛感情を抱かず、自由を愛する二人の性格が結婚生活に衝突を招くと判断し、友人関係を選んだ。

一方、ベア教授は裕福でも若くもなかったが、知識と人間性にあふれ、ジョーにとって精神的な支えとなる存在だった。また、彼はジョーを文学の本質へ導き、作家としての成長を助けた。彼との結婚はジョーにとって外面的な条件よりも内面的な価値を重視した選択であり、自己実現を妨げるどころか支えるものであった。こうして、ジョーは結婚と自己実現の両立が可能であることを見出したと言えるだろう。

5. 結婚後の生活

ジョーはベア教授と結婚し、次のように語る。

> “I’m to carry my share, Friedrich (Professor Bhaer), and help to earn the home.” (506)

彼女は家庭内で責任を分担し、経済的に貢献する決意を示す。この姿勢は「家庭の天使」の理想とは異なり、男女平等を体現している。マーチ叔母から受け継いだ屋敷“Plumfield” (507)を改装し、夫婦で学校を設立。教育者として自己実現も果たし、結婚生活に深い喜びを感じる。かつては結婚が自己実現の妨げになると思っていたが、ベア教授との結婚を通じて、ジョーは結婚が自己実現と両立できることを理解した。

6. 結び

物語の最後、ジョーは次のように語る。

> “The life I wanted then seems selfish, lonely and cold to me now. I haven’t given up the hope that I may write a good book yet, but I can wait.” (515)

結婚後、ジョーは創作活動を一時休止し、教育と家庭生活に専念したが、この経験を通じて、作家としての夢をさらに豊かにできると考えるようになった。ジョーは、恋愛や結婚が自己実現の妨げではなく、むしろそれを支える土台となり得ることを理解した。

作者の Alcott は生涯未婚だったが、ジョーの物語を通して、19 世紀の女性たちに「結婚」と「自己実現」が矛盾しないことを伝えようとしたのではないだろうか。ジョーの物語は、結婚と自己実現が両立可能であることを示す重要なメッセージを伝えていると考えられる。

テキストおよび主要引用文献

Alcott, Louisa May. *Little Women. Little Men. Jo’s Boys.* New York: The Library of America, 2005.

有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房,1988.

長島万里世「『若草物語』におけるルイザ・メイ・オルコットの男女平等観」『英文学論叢』第 58 巻, 日本大学英文学会, 2010.

Maslow, Abraham H. *Toward a Psychology of Being*. New York: Start Publishing LLC, 2013.